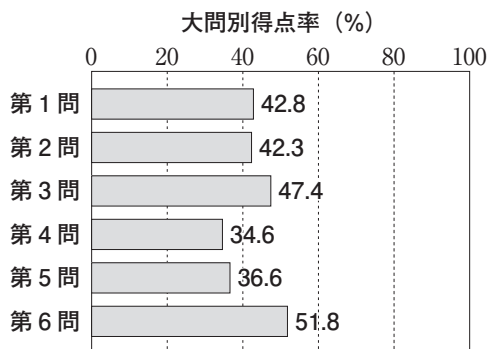
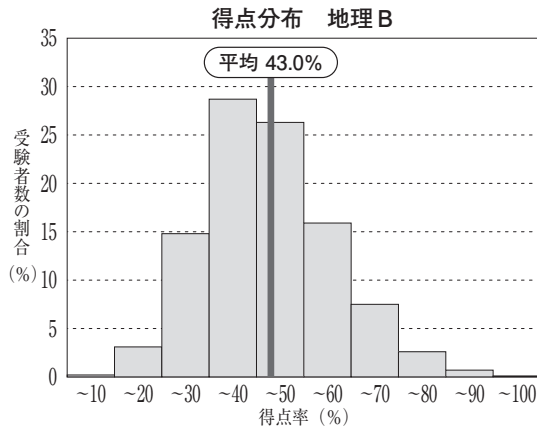


# 地 理 B

できるだけ早く高校地理全般を学習し、基礎知識を身につけよう。

## I. 全体講評

今回の第2回4月センター試験本番レベル模試の平均点は43.0点であり、前回2月の平均点44.5点を若干下回ってしまった。今年のセンター試験本試験の平均点67.99点とも約25点の開きがある。2月から2ヶ月が経過したが、得点力は向上しなかった。大半の受験者が、本格的な地理学習にまだ取り組んでいないことがわかる。基礎学力が不足しているため、極端に正答率の低い問題や、特定の誤答の選択率が正答率を上回る問題も多い。特に地誌の大問(第4・5問)でその傾向が強く出ている。Ⅲ. 学習アドバイスを参考にし、まずは教科書・図説資料集レベルの基礎知識を身につけること。一方、地図や統計図表を読む能力と、中学までの日本地理の知識である程度勝負できる第6問(地域調査)はよく出来ている。地理的センスには自信を持ちたい。



## II. 大問別分析

### 第1問 自然環境と自然災害

新期・古期造山帯などの大地形の分布と特徴は基礎中の基礎。早めに頭に入れよう。

大問全体の平均得点率は42.8%であり、振るわない結果となった。問3の出来が特に悪く、誤答①の選択率45.4%が、正答率21.4%を大きく上回ってしまった。多くの受験者が、緯度の低いメキシコシティの雨温図を、年中気温が高い①であると判断してしまい、同都市が新期造山帯に属する高峻なメキシコ高原上の冷涼な都市であるとは考えられなかった。新期造山帯の山地の分布と、その上にある高原都市・高山都市の気候の特徴をしっかりと学んでおくこと。問1の正答率も41.5%と低く、古期造山帯の山脈A・Bが、プレートの境界に沿うと答えた受験者(①または②を選択した受験者)が全体の52.4%に達してしまった。古期造山帯は侵食の進んだなだらかな山地であること、そしてそれは、プレートの境界を離れてからかなり時間が経ち、激しい造山運動を受けなくなったからであることは基礎中の基礎である。早くこのレベルの問題を正解できるようにすること。

### 第2問 グローバル化と経済活動

まずは、教科書や図説資料集で扱われる重要事項をしっかりと学ぼう。

大問全体の平均得点率は42.3%であり、物足りない結果となった。基礎知識が欠如しているためだ。例えば問4は、誤答③の選択率40.0%が正答率20.4%を大きく上回ってしまったが、多くの受験者が、韓国のインチョン国際空港・プサン港が、日本を含むアジア北東部のハブ空港・ハブ港湾の地位を獲得した事実を知らなかった。地理は暗記科目ではないが、このような教科書・図説資料集レベルの重要事項はしっかりと頭に入れておかないと勝負にならない。

**第3問 村落・都市と生活文化**

この時期としてはまずまずの結果が出た。このまま得意分野に育てよう！

大問全体の平均得点率は47.4%であり、6つの大問中で2番目に高かった。極端に正答率の低い問題も無く、この時期としてはまずまずの出来であったと言えよう。今回出題した、村落、都市、食文化、保健・衛生の各分野は、いずれもセンター試験頻出の重要分野である。このまま得意分野に育てていきたい。ハイレベルな統計表の読み解き問題であった問5を正解できた受験者は、自信を持とう。

**第4問 ロシアと周辺諸国**

地誌分野の学習は後回しになりがちであるが、できるだけ早く学習に取りかかろう。

大問全体の平均得点率は34.6%であり、6つの大問中で最も低かった。正答率が5割を超えた小問は1つだけであり、全体的に低調な出来であった。多くの高校が系統地理を終えてから地誌を扱うため、例年、年度前半は地誌の出来が悪いのだが、2016年度よりセンター試験でも地誌の大問が1題増えるなど、地誌分野の重要度は増している。各々が受験勉強を進めていく上では地誌を後回しにせず、できるだけ早めに学習に取りかかってほしい。最も正答率が低かったのは問1で(16.5%)、新期造山帯のカムチャツカ半島より、古期造山帯のウラル山脈の高度の方が高いと答えてしまった受験者(①②③のいずれかを選択した受験者)が、全体の73.8%に達してしまった。第1問の講評でも述べたが、新期造山帯、古期造山帯などの大地形の分布と特徴は、出来るだけ早く頭に入れてほしい高校地理の基礎中の基礎である。地図帳をまめに開いて分布を覚え、教科書や図説資料集を丁寧に読んで特徴を理解したい。

**第5問 アルゼンチンとフランス**

春小麦・冬小麦などの用語の意味を曖昧なままにせず、正確に理解しておくこと。

大問全体の平均得点率は36.6%であり、6つの大問中で2番目に低かった。第4問の講評のくりかえしになるが、近年、地誌の重要度は高まっているため、高校の授業を先取りして早めに地誌学習を進めることが望ましい。本大問で最も正答率が低かったのは問3であるが(27.6%)、アメリカ合衆国の

春小麦地帯の収穫期をカと判断した受験者(④または⑥を選択した受験者)が、全体の48.0%に達した。春小麦を春頃から収穫する小麦と誤解し、6~8月をその収穫期と考えたのであろう(6月は春ではなく、もう夏なのだが…)。解説に述べたとおり、春小麦は春に種を播いて、秋に収穫する作物である。間違えてしまった受験者は解説をよく読み、春小麦、冬小麦の語義を復習しておくこと。地理は暗記科目ではないが、重要な用語の意味は曖昧なままにせず、正確に理解しておきたい。

**第6問 地域調査(大阪府)**

地理的センスの必要な地域調査の大問で好結果が出た。さらに得点力を高めよう！

大問全体の平均得点率は51.8%であり、6つの大問中で最も高かった。地図や統計図表を読み解く能力、適切な調査方法を選択する能力、中学までに培った日本地理の知識を利用して正解を推理する能力など、地理的センスを試される地域調査の大問で好結果が出たことは喜ばしい。今後も演習をくりかえし、さらに得点力を高めたい。問3の誤答⑥の選択率が58.3%とやや高かったが、日本のニュータウンや大型の住宅団地は、ほとんどが工業団地のような大規模な就労の場を併せ持っていない職住分離型の住宅都市である。この機会にしっかりと頭に入れておきたい。また、問6の誤答②の選択率も44.0%と高かったが、手描き地図は人々の認知空間を知る重要な手がかりとなり得ることを理解しておこう。

**Ⅲ. 学習アドバイス****◆まずは基礎学力を身につけよう！**

今回の模試では、多くの受験者が高校地理の基礎学力を身につけていないことが明らかになった。まずは、地形、気候、災害、環境、農林水産業、鉱工業、都市、人口、衣食住、言語と宗教、地誌…のように、高校地理の全分野を網羅した問題集や穴埋めノートに取り組むとよい。その際、教科書、図説資料集、地図帳、用語集等を積極的に活用して、完全な解答を作るつもりで問題を解いてみよう。そのような学習を続けていけば、高校地理全般の基礎・重要事項が徐々に理解されてくる。